混沌している僕の世界

十十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
混沌している僕の世界

【Ｎコード】
Ｎ４８７７Ｚ

【作者名】
十十

【あらすじ】
幽霊を見れる少年のもとに剣豪少女と勇者と魔王がやってきてカオスになる予定です。

プロローグ

「あ、女の人の霊が憑いてる」

高校に入学してからちょうど二ヶ月が過ぎて、同時にちょうど三ヶ月目である六月一日に入った今日という日の帰り道。

隣を歩いている僕の友――新垣（あらがき）の方をふと見てみたら、その新垣の肩に女性の霊が憑いていた。

女性の霊は、白のワンピースというベタな格好をした大人の女性で、なんだか恨めしそうな目をしている。一体どんな未練があってこの世に残っているのだろうか。

「ちょ、マジか！　おいタカタカ！　お前どうにかしろ！」

「どうにもできないよ。僕は幽霊を認識できるだけだからね」

そう、僕は幽霊を認識することができる。けど、認識できるってだけで、成仏させてあげたりはできない。ちなみに、タカタカというのは僕のあだ名だ。僕は高峰高臣（たかみねたかおみ）だから、略してタカタカ。

「ちっ、使えねえな。所詮はタカタカか。――タカタカかって言いにくっ」

「だったら言うなよ。そもそも使えないのは新垣の方だろ。寺の息子のくせに幽霊が見えないってなんだよ。ぷぷぷ～、エセ坊主～」

僕がそう言うと、新垣は「あ、あのなぁ……っ！」と小刻みに震えだした。どうやら、寺の息子のプライドを傷つけてしまったらしい。

「いいかタカタカっ！　普通は見えねえんだよ！　一〇〇人に霊が見えますかアンケート取ったら、九九人は見えねえって答えるはずなんだよ！　だからお前がおかしいんだよ！　よって俺は使えないわけじゃねえ！　むしろ正常なんだよ！」

ものすごい剣幕。新垣は頭がスキンヘッド（将来寺を継ぐ者としての心構えだとかなんとか）で、おまけに顔がちょっと怖いから、キレるともう不良とかヤンキーとかあちらの世界の方々とか、とに

かく物騒な奴にしか見えない。なので、見た目ほど怖い奴じゃないと分かっていても、ちょっと萎縮してしまう。
「わ、分かった、分かったから。ね？　一度落ち着くんだ、新垣」
「……ほんとに分かったのか？」
睨むように僕を見てくる新垣。
それを見た僕はうんうんと頷きながら、
「ホントホント。確かに新垣の言うとおりだよ。幽霊なんてモノは、見えないのが正常さ」
「だろ？　だから見える必要なんてさらさらねえんだよ」
新垣はお怒りではなくなった様子。ふぅ、よかった。
「……けど新垣、お前は寺の息子なんだからさ、成仏くらいさせてあげられるだろ？　ほら、自分の肩に向かってお経を唱えてみなよ」
「いやいや、唱えてみなよとか簡単に言うな。お経って覚えるのムズいんだからな？　大体よぉ、ほんとに幽霊なんか憑いてんのかよ……」
言って、新垣は自分の肩を怪訝そうに眺める。
そんな新垣に、僕は幽霊の最新情報を教えてやることにした。
「新垣。いまその幽霊はねえ、新垣のことを忌々しげに睨んでるところだよ。しかも、お互いの顔の距離、およそ三センチってところかな？」
「マジかッ！」
言葉を発したとともに、新垣は顔を大きく逸らす。
「別に逸らさなくてもよかったんじゃないかな？　その幽霊、結構綺麗な人だよ」
「マジかッ！　……けどよ、忌々しそうな目ぇしてんだろ？」
「まあそうだけどさ……」
けど、その女性の霊は紛れもなく美人の系統に入る顔立ちをしている。こんなにも若くて綺麗な人がなぜ、もう死んでしまっているのだろうか。……謎だね。
「ま、どうせ俺には見えねえんだし、どうでもいいや。それによ、

やっぱり女は生きてないとな！　そういやもうすぐ夏だし、そしたら水着のお姉さんでも拝みに行こうな！」
白い歯をむき出しにして微笑む新垣。
僕はそれに呆れながら、
「新垣……お前さあ、坊さんになるって奴がそんな考えを持ってていいの……？　煩悩まみれじゃん」
「おいタカタカ。それを言ったらよ、俺はどうやって生まれたんだ？　坊さんである俺の親父が煩悩をかき集めた結果だろ？」
うん、異議なし。
「それもそうだね。じゃあ夏は砂浜で水着観賞をしよう」
ここら辺は海沿いだから、僕の家から徒歩一〇分もかからず海水浴場に行けるんだ。
「よし！　じゃあ約一ヶ月半後の予定が決まったところで！」
「ところで……何？」
新垣の言葉には続きがあるみたいなので、僕は促しをかける。
すると新垣は、自分の肩をビシッと指差しながら、
「どうやったらこの幽霊が放れてくれるかを考えるぞ！」
「ねえ新垣、その人差し指、幽霊のことをおもいっきり突き刺してるんだけど」
しかも、ちょうど目の部分だ。と言っても当然、女性の霊に害はない。なんせ、実体がないんだからね。だけど、女性の霊の機嫌をかなり損ねさせてしまったようだ。
「ちょ、マジかッ！」
「大マジ大マジ。その指のせいで、幽霊さんの睨み方が半端なモノじゃなくなってるよ」
女性の霊は、見得を切る歌舞伎役者よろしく目を見開いている。
「……新垣、お前たぶん、このままじゃ呪われると思うよ？」
「じょ、冗談じゃねえ！　早くなんとかしろ！」
「だからさ、なんとかって言われても僕は霊媒師じゃないし」
「霊媒師じゃなくても見えてはいるんだろうが！　ちょっと話しか

けてみろよ！　平和っていうのはお互いの対話から始まるんだからな！」
「うーん、じゃあまあ……ちょっとだけ、やってみるよ」
成仏させてあげたりはできないけど、話しかけたりならできる。
僕はこの女の人――じゃなくて幽霊のことを綺麗って言っておいたから、もしかすると女性の霊の中で僕の評価が高くなっているかもしれない。
だから、本当にもしかしたらだけど、『新垣から放れてくださいお願いします』って頼んでみれば、言うことを聞いてくれるかもしれない。
「あのー、ちょっとよろしいですか？」
そう声をかけると、女性の霊は僕の方を向く。その睨みは相変わらず力強くて、並々ならぬ怨嗟を感じる。
僕はそれに若干気圧されながらも、言葉の続きを発していく。
「あー、えーとですね……その、どんな恨みがあるのかは知りませんけど、新垣には関係のないことでしょう？　ですからですね、あのー、できることなら放れてく――」
『じゃあ私の恨みを晴らしてくれるのっ！』
女性の霊が声を荒げた。目にはうっすら涙が浮かんでいて、閉ざした口元からはギチチッ……と歯軋りが聞こえてくる。
『ねえ！　どうなの……っ！』
「あ、え、いや……」
言葉を上手く返せないでいると、女性の霊は続ける。
『ねえ！　学生のあなたには分からないでしょ！　職場でいじめられて！　心のよりどころだった彼氏にはフラれて！　もう人生最悪よ！　だから自殺してやったのよ！　私を苦しめに苦しめた職場と彼氏に復讐するためにね！　けど、死んだところでどうにもならなかった！　この姿になってから職場と彼氏の家に化けて出てやったけど、それしかできなかった！　だからあなたが恨みを晴らして！　アイツらを痛めつけてきなさいよ！　そうすればこの子から放れ

てあげる！　さあ私の未練を晴らして！　私を成仏させてみて！』
そんな台詞を聞いた僕は、またかぁ……と思う。
何がまたかぁ……なのかと言えば、僕はまた、まったく役に立てないんだなぁと罪悪感を覚えてしまうってこと。
だって、せっかく幽霊の姿が見れるっていうのに、さらには声だって聞けるっていうのに、おまけに会話までできるっていうのに……僕にできることは結局――それらのことだけなんだ。
僕はいままで、かなりの数の幽霊を見てきたし、それと同じ数だけ会話もしてきた。
幽霊の話を聞いている最中っていうのはもちろん、幽霊の顔を見ることになるわけだけど、その際の幽霊たちの顔は辛そうで、悔しそうで、苦しそうで、泣きそうで……生きていた時によほど嫌なことがあったんだろうなぁって、しみじみと感じ取れるんだ。
でも、僕はどの幽霊に対しても、何もできなかった。
幽霊たちの恨みを晴らして、成仏させてあげることが、できなかった。
さっき、僕は幽霊を成仏させてあげることはできない、って言ったけど、それは嘘だ。やろうと思えば、成仏させてあげることはできる。だけどそうするためには、成仏させてあげたい幽霊の、恨みやら未練やらを晴らしてあげないといけない。
そして、それが難題。
いま女性の霊が言っていたみたいに、未練っていうのは、そのほとんどが復讐なんだ。だから、容易に手伝ったりはできないし、というより、復讐と称して他人を傷つけるような真似を、僕はできないしやりたくない。
だからこそ、僕は幽霊たちの願いを受け入れてあげられない。
その結果、僕は霊の話を聞くだけで終わってしまう。
……で、それが僕自身の罪悪感へと変わってしまう。
助けを求めている幽霊の話を聞いたにも拘らず、僕は何もしてあげられない。

そんなもどかしさが、僕の罪悪感の正体。
あーあ、こうやって罪悪感を覚えてしまうってことはハナから分かってたんだから、話しかけなきゃよかった。
そんな風に思いながら、僕は女性の霊に言葉を返す。
「……あのですね、いま思えばこいつの実家、お寺ですから。ええとつまり、いつまでもこいつに取り憑いていると――無理やり滅せられるかもしれませんよ？」
この言葉は、僕のせめてもの情けだ。
この世にもっと長らく留まって、そしていつか、自分の手で復讐してみてください。
そういう意の表れだ。
しかし、女性の霊はそれをどういう意味として受け取ってしまったのだろうか、ぎょっとした表情を浮かべたのち、慌てたようにどこかへ飛んでいってしまった。まあ、僕が滅せられるかもしれないって言ったから、それに恐怖して逃げたんだろうけどね。
「新垣、もう大丈夫。幽霊はどっかに飛んでったよ」
「お、そうか！　んだよ、やりゃあできんじゃねえか！」
「何を偉そうに言ってるんだよ……ったく、ホントはさあ、新垣がこういうお祓いをできるようにならないとダメなんだぞ。そこのところ分かってるのか？」
僕がため息をつきながら告げると、新垣はニィと笑った。
「いつかできるようになるぜ！」
「ダメだこりゃ……」
一体全体何十年後の話になるのだろうか。
んー、新垣のことだから、隠居間近になっても全然できなかったりしてね。
「あ、そういえばよぉ……」
「ん、何？」
思い返すように言葉を紡いだ新垣は、そのまま言葉を続ける。
「……幽霊は、どっかに飛んでったんだろ？」

「そうだけど……それが？」
「それは成仏させたってことなのか？」
「いいや、この町のどっかに飛んでった。言葉の意味そのままだよ」
ちなみに、速度はコンコルドぐらいだった。幽霊ってかなり速いんだよ。
「タカタカ！　お前はなんちゅうモンを世の中に放出してくれてんだっ！」
「大丈夫だって。新垣には二度と取り憑かないだろうからさ」
「そういう問題じゃねえよ！　俺みたいに幽霊に取り憑かれる人が出るかもしんねえじゃねえか！　まったく、タカタカは何やってんだ！　ちゃんと成仏させてやれよ！」
「そうは言うけど難しいんだよ……」
僕だって、幽霊を簡単に成仏させてあげられるのなら、見える霊を片っ端から成仏させてあげたいよ……。
そう思う僕の顔はどんなものだったのだろうか、新垣が改まったような感じで言葉を紡いでくる。
「あ、いや、悪かったな……。そんなこと、タカタカに言ってもしょうがねえわな」
「いや、別にいいんだよ。成仏させられなかったのは……事実なんだし」
そのあとは、お互いしばらく黙り込み、無言で夕焼けの空の下を歩き続けた。
再び言葉を交わしたのは、いつもの分かれ道でのことだった。
「じゃあ、俺はこっちだから――って別に言わなくても分かるか。じゃ、また明日な。タカタカ」
「うん。また明日」
告げ終われば、お互いそれぞれの方向へと歩き始める。
そうすれば、あとは帰るだけ。
特に、イベントはない。
こうして、平凡な一日がまた終わる。もっとも、幽霊と会話した

日を平凡と位置づけていいのかは多少判断に迷うけど。
でも、僕にとっては平凡かな。
結構慣れたもんだしね。
「さてと、今日は帰ったら何しようかなぁ……」
夕日を背にそんなことを呟きながら、僕は帰路に着くのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4877z/

混沌している僕の世界

2011年12月16日18時01分発行